
らき すた もう 1 人の中心人物

冬雪穂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

らき すた もう1人の中心人物

【Nコード】

N2907F

【作者名】

冬雪穂

【あらすじ】

山村白緑・・・陵桜学園に通う1年生。現在、泉家に居候中。そこで新たな友達や、2年前にすれ違った少女と再会、そこから繰り広げられる学園ストーリー。8月3日に改名しました。申し訳ございません。

プロローグ&登場人物（前書き）

始めましてHOWAITOです。

この作品が初書きなので、うまく表現できていないところがありますが、よろしく願います。

プロフィール&登場人物

私は校舎の教室から桜の木を見ていた。桜の木にはツボミが咲き始め春が近いことを告げる。

私は中学3年生で後2週間で中学を卒業する。

「この学校も、もう少して卒業か、」

私は県内の高等学校に入学が決まっていて、後は卒業を待つだけとなったが、その前に大きな問題がある。それを越えなければ、高校に入学ができない事になってしまうからだ、

登場人物

泉 こなた

(いずみ こなた)

年齢：15歳

身長：143cm

出身地：埼玉県

誕生日：5月28日

血液型：A型

利き手：両手利き

家族構成：父、長女

胸ランク：極小

好きなもの：チョコロール、鶏肉、萌え

嫌いなもの：スポーツ中継の延長、選挙速報などアニメに影響がでる番組、もずく

得意科目：体育

苦手科目：理系

好きな色：赤、黒

漫画やアニメ、ゲームが大好きな女の子。

その為、思考パターンが好きな作品に影響される……。高い運動能力を持つが、その能力をいかす事のないインドア系。

柊　つかさ

（ひいらぎ　つかさ）

年齢：15歳

身長：155cm

出身地：埼玉県

誕生日：7月7日

血液型：B型

利き手：左利き

家族構成：父、母、長女、次女、三女、四女

胸ランク：中

好きなもの：甘いもの、目新しいもの。

嫌いなもの：ピーマン、オカルト、ホラー

得意科目：家庭科

苦手科目：体育

好きな色：白

かがみの双子の妹。雰囲気流されやすい。典型的なお人よしな癒し系。実はマヨラー？

柊　かがみ

（ひいらぎ　かがみ）

年齢：15歳

身長：156cm

誕生日：7月7日

血液型：B型

利き手：左利き

家族構成：父、母、長女、次女、三女、四女

胸ランク：中

好きなもの：お菓子

嫌いなもの：貝類、体重計

得意科目：英語

苦手科目：家庭科

好きな色：堇、黒

つかさの姉。思考が普通で一番まともな人物かもしれない。仲良くなるに情に厚いツンデレ系。

高良 みゆき

（たから みゆき）

年齢：15歳

身長：162cm

出身地：東京都

誕生日：10月28日

血液型：O型

利き手：左利き

家族構成：父、母 長女

胸ランク：巨

好きなもの：茶碗蒸し、和菓子、勉強。

嫌いなもの：生魚、お医者さん

得意科目：無し

苦手科目：無し

好きな色：オレンジ

容姿端麗、成績優秀、品行方正な優等生だけど天然系な女の子。完全超人&歩く萌え要素

山村 白緑

（やまむら はくりょう）

年齢：15歳

身長：150cm

出身地：愛知県

誕生日：6月6日

血液型：B型

利き腕：両手利き

胸ラック：大

家族構成：母、長女

好きなもの：林檎、カレー、音楽鑑賞、旅行、ゲーム

嫌いなもの：梅干し、ゴーヤ、海

得意科目：数学、英語、社会（地理、歴史）

苦手科目：無し

好きな色：白、緑、青

こなたとは幼馴染み。得意科目が多く、テストは常に満点に近い。漢検等を受験しており、中学卒業時点で、漢検準1級、英検1級、歴検1級、暗算10段を取得している。姉さんの存在。

ブログ&登場人物（後書き）

読んでくださいましてありがとうございます。

「らき すた」中心人物の4人＋1人の物語です。今のところ中心人物＋1人の紹介をしました。他の人たちは出てきたときに前書きで紹介します。

第1話 蒼髪色の天使

桜の木につばみが咲き始めた3月、春が近いことつげる。

私の名前は「山村^{やまむら} 白緑^{はくりょ}」中学3年生で、後2週間で中学を卒業し高校へ入学し夢を求め続ける人や、家の家業を継いでいる方もいるはず。私は県内の高等学校に入学することがもう決まっている。私は自分の教室から外をみる。この教室もあと2週間でサヨナラだ、後は卒業を待つて入学を待ただけだが、私はその前に超えなければならぬ問題があった。

それは昨日のことになる。

妄想

私は普段どおり家に帰宅した。ところが、1つだけ変わったことがある、荷物が纏められていた。そして母もいた。私は母に聞いた「どうしたの？」

私は母に聞いた。母は間を置かず話した。

「白緑、悪いけど名古屋に転勤することになった。」

私は驚きで声が出せなかった。

「後は1人で生きて行くのよ、卒業式まではいるから、」

妄想終了

私は後の事でいっばいだった。料理は母から習っているため問題ないが、1人で生活するのがこんなに早く来るとは思っていなかった。私は愕然して外を見ていた。この後どうしようか、その事でいっばいだった。その時

「どうしたの？」

私に聞こうとする優しい声、振り返るとそこには私より背が低く蒼い長い髪の女の子がいた。

「なにかあったのみどりん？」

この子は「泉こなた」小学生の頃からの幼馴染で私とこなたは9年間同じクラスで、高校も私と同じ高校に通うことが決まっている。

「うん、ちょっとね」

私はため息をついてこなたから目をそらす。

「隠し事しないで、話してごらんよ、みどりんが隠し事するなんてみどりんらしくないよ。」

私は再びこなたを見つめ、話した。

「母が名古屋に転勤することが決まったの、」

するとこなたは、

「そっか、みどりんお母さんしかないのだったね、」

その言葉を聞いて私は驚愕した。

こなたも私と同じく両親の内片方しかないのだ。こなたは、お父さんはいるが、お母さんはこなたが生まれた直後に亡くなったそう
だ。

私はまだいい方だ、お父さんは私が5、6歳くらいのときに交通事故
故で亡くなっている、性格、声はわかつている。

「それで、みどりんはこの後どうするの？」

こなたが聞く。

私は

「やっぱり1人暮らしかな、」

「1人暮らしは大変だよ、出来るの？」

「まあ大学に入るときは1人で生活することを決めていたからね、
でもこんなに早く来るとは思わなかったけどね、」

私は再び桜の木を見る。

しばらく間があきこなたが聞いてきた、

「それじゃあ私と同居しない？」

こなたがそう言った。

「え？いいの？」

「家族はお父さんだけだし、お父さんの許可が下りれば大丈夫だよ
！」

「うーんでもね、」

私は迷った、こなたの話は嬉しかったけど、それでは泉家に迷惑が

かかる。でも私の友達は何の高校に行くことが決まっっていて、同じ高校となるとこなたしかいないのだ。

「本当にいいの？」

私はこなたに聞いた。

「他に当たる所無いでしょ、だったら私にたよりなよ、」

「それじゃあ頼もうかな？」

私はこなたが天使に見えた。困っていた私を救ってくれたのだから。

「オッケー、それじゃあお父さんに伝えるから先に帰るね、」

こなたはカバンを持って教室を出た。

私はこなたが教室から出るのを見送ると、再び桜を見つめた。

泉家自宅

リビングで話す、こなたとお父さん

「なるほどな、」

「ね、幼馴染で唯一同じ高校に入るのに、これじゃあみどりんが、かわいそうだよ！」

こなたは父に放課後の出来事を話した。

「まあ他に行く所が無いのであれば、お父さんはかまわんな、」
お父さんはそう話した。

「それじゃあみどりんに連絡しないと、お父さんのOKが出たってね。」

その頃白緑は学校を出て、家路に着こうとした。

「こなたのお父さんどんな人かな？」

私は家に着くとポケットから鍵を取り出して、中に入ろうとした時、
「プルルル、プルルル」

電話が鳴った。こなたからであった。私は電話を取った、

「もしもし？」

「あ、みどりん？お父さんの許可が出たよ、」

「そう、ありがとうこなた、」

「それじゃあまた明日。」

「うん、また明日。」

「ツー、ツー、ツ、」

電話が途切れて私は電話を置いた。

「まあこれで高校生活を迎えられるわね、」

第2話 蒼髪色の自宅

こなたと同居をする事を決めてから3日後、いつものように登校していた時、

「おーみどりーん！」私は後ろを振り向かなくても誰なのかすぐに分かった。

「おはようこなた、」こなたは私に追い付くと、

「あのね、お父さんの事なんだけど、お父さんみどりん入る予定の部屋を掃除してたんだけどね、」

「へえー早いじゃない」

「ンでね、掃除してたら、お父さんの大学時代のアルバムが出てきたんだけどね、」

「よくあることじゃないの、」

「でもお父さん、掃除するの忘れて、アルバム見始めたの、」

「ひよっとしてお母さん？」

「そうなんだよね、私のお母さん、どんな人が解らないけどね、」

（へっ？）

私はビツクリした。お父さんから聞いてないのかな？

「お父さんから聞いてないの？」

「いや聞いているよ、でもお父さんに何回聞いても『あなたはこなたそっくりだったよ、』しか言ってくれないんだよね、何でかな？」

「・・・・・・・・」

私は黙りこんだ、

親の心子知らずて言うのか、多分お父さんは話したいはず、でもこなたを悲しくさせないように言わないようにしているのではないかと、私は思った。

「まあ、知らない方が良くこともあるんだから、もういいじゃない、」

「みどりん、」

こなたは黙りこんだ、みどりんは私とは違い物心着いた時にお父さんを亡くしているのだ、

「ゴメンねつらい過去を思い出させて、」

「いいよ、もう慣れてるし、気にしないで、」

その後私とこなたはアニメやゲームの話しをしている内に学校に着いた。そして下駄箱に着いた時に

「ねえこなた、」

「ん？なに？」

「本当は卒業してから言うつもりだったけどね、同居しても良いかな？」

「え！？どうして？」

「お母さんの転勤が明日に決まってね、明日から泊まる所無いんだよね、」

「そつか、それならOKだよ、」

こなたは親指を立てて言った。

「ありがとう、家具は明日に届くから、今日は、寝る場所があればいいよ、」

「OK、それで何時に来るの？」

「お母さんが今頃、こなたの家に行つて、着替えと日用品を預けに行つてから会社に行くつて言つてたから、多分一緒に帰ると思うよ、」

「そうなんだ、でもみどりんが私の家に来るなんて、中2の冬以来じゃない？」

「まあほとんど私の家で遊んでたしね、受験もあつたし、」

（それ以前にこなたのやっているゲーム、あれを何とかしてほしいんだけどね、）

話している内に教室に着き授業が始まった。と言っても3年生全員受験を終えており、授業は午前中に終わった。

「みどりーん！帰ろう、」

「うん、帰りましょう、」

私とこなたは学校を出てこなたの家に向かった。
家に向かっている途中私はこなたに話をした。

「ねえこなた、」

「ん？なに？」

「私、こなたのお父さんと面識無いんだけど、どんな人なのか知らないんだけど、」

私はこなたのお父さんと面識が無かったので聞いた。

「うーん・・・簡単に言うと、ロリコンなエロオヤジ」

「・・・どんなお父さんなの？」

「言ったとおりだよ、」

本当なのか半信半疑に思いながら、こなたの家に着いた。

こなたの家は1戸建ての2階建てで、私の住んでいた家はアパートだったので、私に1戸建てに住むのが夢だった。

「ただいま！」

「お邪魔します。」

しかし家からは何も聞こえない、「お父さん出かけているの？」

私が聞くと

「多分書斎じゃないの？」

「そう、それじゃあこなたの部屋貸して、私服に着替えるから、」
そう言うと私は玄関にあった鞆を持っていき、こなたの部屋に向かった。

こなたの部屋は階段を上がって、真っ正面の部屋なのですぐに分かった。

ガチャ

こなたの部屋のドアを開ける、

「相変わらずすごい部屋ねえ、」

こなたの部屋には、フィギュアや漫画本が沢山あり、まさしくオタクの部屋だった。

この部屋が幼馴染みの部屋だと思えない、

「…………着替えるか、」

こなたの部屋を見渡した私は着替えることにした。
ガチャ

「ねえみどりん」

こなたが入ってきた、

「ん、どうした？」

「お父さん、原稿出しに行つたみたい、2時には帰るって、」

「そうなんだ、」

私が答えると

グウー

「ほほう、今鳴つたのはこの腹か？」

こなたが私のお腹を摘まむ、

「うわっ！…………うんそうみたい、」

「それじゃあお昼にしようか、カップ麺で良い？」

「私的には即席めんの方が良いんだけど、今日は仕方ないか、」

私とこなたは部屋を出てキッチンに向かった。

第3話 蒼髪色の父（前書き）

遅くなりました。自分の都合により投稿が1ヶ月遅くなりました。

第3話 蒼髪色の父

昼御飯を食べ終え、こなたのお父さんの帰宅を待っていた。

こなたはテレビゲームをして、私は勉強していた。

「ねえみどりん」

ゲームを止めて聞いてきた

「なに？」

私も勉強の手を止めた

「私が見る限り、何時も勉強しているけど、そんなに楽しいものなのかな？勉強って」

「まあ毎日やっているからね、楽しいと言うより、勉強しないと、生活リズムが狂いそうで、」

「く、狂うって毎日どの位しているの？」

「うーん……平均3時間はしているかな」

「さっ3時間！？よくもそれだけ集中して出来るね」

ゲームしている感覚と同じだと思うけどな、

私は勉強を始め、こなたもゲームを再開した。

午後4時30分

「よし今日の分終わり」

腕を伸ばしリラックスする。

「にしてもお父さん遅くない？」

時計を見てこなたに聞く

「あっそうだね」

「何時に終わるって言ってた？」

「遅くても3時位には終わるって言ってたけど」

こなたが父からの電話の話を思い出す。

「都心からだとしたら電車で約1時間……もう着いている頃よね？」

「そう……だよね」

悪い予感がする、2人共そう思った。

ブロロロ―

「車？」

私、こなた共玄関に走る。

ガチャ

玄関の外には青い髪をした見た目40代の男性がいた。

えっ？誰？・・・まさか

こなたの方を向く

「もう！お父さん、遅かったね」

やっぱりー！

「いやあ、すまん、会議が長くなって3時30分にやっと終わったんだよ、それに電話したし」

「えっ？でも家の電話鳴りませんでしたけど」

私が口を挟む

「いや、家じゃあ無くてこなたの携帯に掛けたのだから」

「へえーそうでしたか」

こなたの方を向き睨む

「そっいえば携帯何処だっけ？」

「あのねえ」

怒りをこらえて家の中に入る

「これからお世話になります、山村 白緑です。よろしく願います。」

「よろしく、話は聞いてるよ、成績優秀で運動神経が良くて」

「いえ、そんな」

思わず照れる

「刺激が強い物が好きなんだってねえ」

はぐあ！なっ何で知ってるの？・・・まさか、

「むごっ！」

こなたの首を持ち壁際に連れ込む

「こーなーたー！？何であんなことまで教えたの！？」

怒りのオーラが白緑から出ている。

「だつ、だって本当の事じゃん？みどりんの趣味は異常だもんね、刺激g」

「もつ、もう言つな！それ以上言つな！」

はあはあはあ・・・

こなたが話している途中で無理矢理話を止めた、

「さて、こなた、今日はどうするんだ？もうそろそろ晩御飯の準備したらどうだ？」

時計を見ると5時を回っていた。

「ぬあ！そつだ準備しなくちゃ！」

慌てて台所に向かう、

「あつ！私も手伝うよ」

私も台所に向かった。

P M 6 : 3 0

台所からはカレーの匂いが漂っていた。

パクッ

「どう？美味しい？」ジャガイモとルーを味見

「うん！美味しい」

満面の笑みを出した、

「よし後は30分煮込むだけ」

蓋をして、台所から去る。

リビング

「今夜はカレーか？」父が聞く

「はいっ！」

「最初は肉じゃがの予定だったけど、カレー粉の賞味期限が迫って

「だからカレーにしたの」
「そうか、ご苦労様」

食事後

「あつあの、こなたのお父さん？」
「お父さんでいいよ、なんだい？」
優しい笑顔で聞いてくる。

「今日寝る所何ですけど、何処がよろしいでしょうか？」
そう、今日はもう遅いので、部屋の模様替えが出来ないのだ、覗いた時はまだ整理出来ていなかった。

「私の部屋は？」
こなたが割り込む

「こなた？ ネットゲーするでしょ？ 明日休みだし」
「もちろん、あつみどりん明るいの嫌？」
自信満々に答えたが、シヨボンしている

「うん、私真つ暗じゃあ無いと眠れなくて」
「だとしたら、お母さんの部屋は？」

「いやあ、それだとお母さんに悪いでしょ？ それにお父さんが絶対ダメだつて言うに決まってるよ、ねえお父さん？」
お父さんの方を振り向く。

「お父・・・さん？」
考え事をしている用に見えた。

「ん？ 何だ？」
どうやら聞いていなかったみたい
「あついやその、私の寝る所がお母さんの部屋が良いじゃあ無いかなつて事になったのですけど、構いませんかね？」
私が話していた事を説明した。

「ああ構わないよ」
笑顔で答えた、

「ありがとうございます」

P M 1 0 : 3 0

お母さんの部屋に布団を持ってきて、パジャマに着替えて、布団に入ればもう寝れる状態であった。

「これからお世話になります、山村白緑です。よろしく願います。こなたのお母さん。」

こなたのお母さんの仏壇の前で挨拶をして、

「もう寝ようかな？」

布団に入り寝る体勢に入る。

・
・
・
・
・
・
・
P M 1 1 : 2 0

「は」

眠れない、他人の家だとなぜか落ち着かないな、

「トイレ行こ」

落ち着かせるためにトイレに向かう。

ジャー

「ふ」

眠くなってきたし、もう寝よう、

お母さんの部屋に向かう、

「あれっ？」

誰がいる。

蒼く長い髪、背が低く、誰か分かった。

「こ、こなたどうしたの？」

そう呟くと振り返り、

「えっ？あのく？私の事見えるのですか？」

「えっ？」

こなたじゃない、背丈、雰囲気、声の質はそっくりだけど、透けていて、よく見ると、はね毛（アホ毛）と右目の下に黒子が無い、そして優しい瞳

「あつ、いやっ、見えるって、私の目の前にいますけど・・・」

「そう、やはりあの娘と私はやっぱり似ているのね・・・」

も、もしかして・・・この人・・・

「始めまして、山村白緑ちゃん。私はそっくんの元妻、そしてこなたの母親の泉かなたと申します」

その女性は優しく微笑んだ・・・。。。

第3話 蒼髪色の父（後書き）

今回より。「さーて次回の『みど すた』は？」（らき すた+白緑の緑〓みどり〓みど すた）を行います。

「白緑です。」

「まさかこなたのお母さんが出てくるなんて、全く思っていないませんでした。幽霊に分類されるかも知れませんが、喋っていますので、幽霊に分類されるのでしょうか？」

「次回『蒼髪色の母』」

お楽しみに、

第4話 蒼髪色の母（前書き）

本日2回目の投稿です。

第4話 蒼髪色の母

「こ、こなたのお母さん!?」

そんな・・・確かこなたが産まれた後亡くなったh・・・!

「ふふ、そう君に遇うためなら私はどこでも現れるわ」

そつと私の唇に人差し指つける。

その行動に私はドキツとした。

・・・ははは、こんなに綺麗な人、私あつた事無いよ、絶対に男子はメロメロになるし、こなたのお父さんも惚れる訳だ・・・

私はかなたさんと向かい合う格好で座っていた。

「・・・こなたには本当感謝してます」

「えっ?」

「・・・私が小学2年生の時、此処に引っ越して来た時、1番最初の友達がこなただったんです。こなたと私が友達では無かったら、私は名古屋の高校になっていたかも知れないんです、・・・だからこなたには本当に感謝しているのです」

私がこなたと出会った頃の話をしていると、

「それは・・・あなたが積極的にこなたに近づいたからではないでしょうか?」

「えっ?どうしてそれを?」

言っていない事が当たっており、ビックリした。

「言ったでしょ?私はいつもこなたを見ているって」

「そっ・・・でしたね」

私幽霊と会話しているんだよね?

それで冷静でいる私も驚きだよ．．．．ね？

「あの日から．．．．．」

「？」

「あの日からいつも彼方からそう君達を見守っていたわ．．．」
あの日とは亡くなった日の事だろう。

でもまさか、幽霊が実際にいるとは思わなかった。2次元、3次元は作者が考えたことで、納得できるけど、実際私は全く信じないほうで、TVで神霊現象って言う特番でやっているけど、「やらせ」、「CG合成」と思っていた．．．けど目の前にいるのは、もう10年以上前に亡くなった人、話している事を否定することもできない．．．幽霊だと思っしか無い。

「あの時、そう君、たくさん泣いてて．．．．．見てられなかった」

「．．．そりやそうですよ。大切な人がもう会えないのですから、．．．もうあの笑顔も、怒った顔も、泣いた顔も見れないのですから．．．私も経験しましたから、お父さんの気持ちも分かるんですよ．．．でもその時、あなたは小さかったらしくてかなたさんのこと．．．」

私は言葉を詰まらせる。

「．．．いいのよ。そう君が元気に育ててくれたから」

そつと微笑みを渡す。

それが私には寂しそうに見えた。

「それにあなたと出会ってからあの娘、前より明るくなってると思うの、だからありがとう」

「い、いえそれは私の方です。こなたのおかげで此处までこれたのですから」

照れながら私は頭をかく。

「でもこなたとであつたあの日に、私が積極的に声をかけなかったら、私はこなたと一緒に生活できなかったと思うと、声をかけて良かったと思います」

「そう・・・あなたは優しいのね」

「え？」

優しい？

そういえば一昨年の夏、鷺宮町の夏祭りに行った時にぶつかった子の財布を正直に教えたら、「あなたは優しいのね」って言われたっけ、「自分じゃわかってないと思うけどそれはあなたの長所だから大切にしてね」

この細く包む声、懐かしく感じた。私のお母さんと雰囲気似ていた。

「じゃあ私はいくわね」

「え、こなたの顔を見なくていいんですか？」

「ええ、白緑ちゃんと話せただけで楽しかったから」

「そう・・・ですか」

いまいち納得出来なかったけど、かなたさんが望まない以上しょうがないことだ。

私は潔く引いた。

「じゃあさようなら」

かなたさんが消えていく、

「かなたさん！」

私が叫ぶとかなたさんは微笑みを見せ消えていった。
ガバッ

「かなたさん！」

チュンチュンチュンチュン

「えっ？」

窓からはまぶしい光が差し込んで来て朝であることを表していた。

「今のは夢だったのかな？」

携帯の時計を見るとAM6:29だった。私の起床時間である。

AM6:30

「曖昧3センチ そりゃぶにつてコトかい？ ちよっ！らっぴんぐが制服・・・だぁぁ不利つてこたない ぶ。がんばっちゃ やっちやっちやそんなときやーっち&Release ぎョッ 汗 (Fu)々(Fu)の谷間に Darling darling FREEZE!!」

目覚ましに設定した曲名が流れて止める。

「あれは・・・夢だったのかな？」

回りを見渡しても、昨日とあまり変わらない。やはり夢だったのか、
「さて朝ごはんにしようか」

お母さんの部屋から出て台所に向かう、

その後ろで、薄っすら人の影が、

「うふふふ・・・」

そして、綺麗な笑い声

第4話 蒼髪色の母（後書き）

さーて次回の『みど すた』は？

「白緑です。」「こなたです。」

「まさか、みどりんがアニソン入れてるとは思わなかったよ」

「そっち？お母さんのほうじゃなくて？」

「そりゃーお母さんの方もビックリしたけど、アニソンの方がびっくりしたよ、だって『もってk』」

「はいストップ！次回予告なんだから、ここでストップ！」

「はいはい」

「次回、『蒼髪色家の日常』」

お楽しみに、

第5話 蒼髪色家の日常

AM 7:30

はくりよう

台所にて朝食の準備

無論エプロン姿だ

「よつと！」

調理していると、

「おはよう」

お父さんが台所に顔を覗かせた。

「おはようございます」

「エプロン姿が似合うね？」

「いえ……それほどでも……」

思わず照れる

「何時ごろ起きたんだ？」

「6時30分です」

「結構早いなあ？土日だからもう少し寝てれば良いのに」

「私は1年、365日、同じ時間には起きて寝ています」

「えっ？大晦日もか？」

「大晦日も……そうですね、22時30分には寝ました」

「今年は？」

「私の友達に神社を受け持っている友達が居て、一昨年はそこで巫女の手伝いをしました。今年は受験があつたので、行きませんでした」

本当は行きたかったのだけど、目標の高校に行くために、あの時は毎日勉強漬けだったなあ、

「……巫女ねえ？」

薄っすら笑っていた。

「（なっ？なにこの人？なんで笑っているの？）」

そつえば、こなたの趣味の現況はお父さんだったよね？

つと言うことはこの人《お父さん》もオタクかあ？

「んっ？」

なんか焦げ臭い……

「あーしまった」

玉子焼きが焦げかけていた

カッチ

「なっ何とかセーフかな？」

焦げかけていたが、食べれない事もなさそう、

「うーん……食べれない事も無さそうだしなあ？良いんじゃないか？」

「っほ……」

よかった

「（失敗した姿も萌えるなあ？）」

また薄っすら笑っていた。

私はその姿をみて思わず引いた。

「（何でかなたさんはこの人と結婚したのかなあ？）」
そう思っていると、階段の音がした。

「こなた起きたかな？」

「おはようー」

かなり眠たそうだ

「おはよう、眠たそうね？何時に寝たのよ？」

「いやー時計で見た限り、3時までには起きてたかな？」

マイペースで話すこなたに対して

「……しっ信じられん」

私は引いた

「（・・・この家族には本当に驚かされる）」

AM7:45

リビング

私とこなたとお父さんで朝食を取ることに、

メニューは白御飯、玉子焼き、若布と豆腐の味噌汁、ソーセージ

おかずはすべて私が起きて作ったものだ。

3者そろって合掌し

「いただきます」「」

私の作った朝食に手をつけるこなたとお父さん・・・、どうだろう

?・・・おいしいかなあ?」

「あつあのーおいしいですか?」

「うん!うまい!」

「私を作るより上手かも!」

「本当!?・・・お世辞じゃあないよね?」

「『私を作るより』はお世辞」

「・・・へっ?」

こなた・・・今・・・私の空気ぶち壊したよ・・・?

「でもちゃんとおいしいよ!」

こなたの笑顔がそれをものがたっていた。

「・・・ありがとう、こなた」

照れながら言う私に、

「みどりんってツンデレ駆るんでるよね?」

また私の空気、ぶち壊したよ・・・、

AM10:00

私の新しい部屋の掃除を終えると、都合よく私の荷物が届いた。荷物はダンボール5つ分

1つは小さいタンスが入っていて、その中に洋服が入っている。そしてもう1つは夏服や浴衣が入っている。

残り3つは……、本とか私の日常的に必要な物がたくさん入っている。

荷物が少ないのは、引越し前に整理したからだ、まずタンスを運ぶことにした。

「けっ結構重いね？」

「そりゃあ服が入っているからね」

こなたと2人がかりで運ぶ。

お父さんは、

「見られたくないものがあるから、お父さんはなるべく手伝わないで欲しい」

つと言ったら、悲しむかのように書斎に消えて行った。

「でもなんでお父さん戦力外したの？」

「……そっそれは……、もう……きてるからよ……」

恥ずかしげに答える私

「あくなるほどね、そりゃーお父さんには見られたくないよね？」
答えが分かったようだ、

「特にこれは……、見られたくない」

腰のポケットから見られたくないものを取り出した元に戻した。

「何時から来てるの？」

「中学2年の夏からだから……、1年半かな？」

思えばそんなに経っているのか……、

「そっか」

軽くスルーされた。

「こなたは？もう来てるの？」

私が聞くと……、

「それがまだなんだよね？やっぱりこの体系だからかな？みど

りんがうらやましいよ」

じーっと私を見つめる。

「でっでも来ると大変よ、長いと2週間近くは続くし……」

「そうなんだ……」

やっぱり体験したこと無いようだ。

「さてと、ここに置こうか？」

位置は泉家にあるタンスの真横

「そうね！そこにおいてくれる？」

私がOKを出すとこなたはタンスの横に置いた。

「後は小さいダンボールだけだね？」

「そうね、後はダンボール4つだけね」

私とこなたは1階に降り、残った荷物を取りに向かう。

「重っ！？なにが入ってるのこれ？」

こなたは格闘技経験者で結構体力には自信があるのだが、持ち上がる様子は無い。

「あゝ、それは結構重いかも、2人で運ぼう？」

「うん」

2人で運ぶが結構重い、

「（詰めすぎたかな？）」

部屋に着き、運んできた荷物を置き、

「中見てもいい？」

「だめよ！まだ荷物があるんだから、全部運んでからよ」

私が怒り気味で言う……

「えー？いーじゃん？ちよつと位見せてくれたってさあ？」

背中にへばりつかないでくれよ……

「だあー分かったから離れなさいよ、中身は漫画本よ、その本棚に並べといてね」

部屋から出て1階に行き荷物を取りに戻る。残る荷物は3つ。その内1つを手に取り、階段を上がる。

「こなたのことだから、漫画見てるだろうなあ？」

階段を登りきり私の部屋に入る。

「あつあれ？」

しかし、私の部屋に着いた時私の目に入ったのは、漫画を棚に並べるこなたがいた。

「ん？どうしたのみどりん？」

「あついや、こなたの事だから漫画見てるかな？っと思って・・・」

予想外の展開に戸惑う私

「いやゝ見ようっと思っただけど、どれも持ってるやつだしさあ」

「（そうだった、こなたはいっぱい漫画持っているんだった、だからこなたが持つていない漫画本なんて私は持つていない）」

「どうしたのみどりん？」

「な、何にも」

その後は残りの荷物を運び、荷物を出して、配置して無事終了した。

終了後

「君にめぐり合えたそれが奇跡ゝ！」

自分の部屋でイヤホンをつけて大好きな音楽を聞きながら歌っていた。

「楽しそうに歌ってますねゝ？」

「うひゃう！？」

歌っていた所を見られていた事は・・・、内緒にしておきたい。

第5話 蒼髪色家の日常（後書き）

さーて次回の『みどすた』は？

「はくりようです」

「まあこれで、私も泉家の一員なのよね？」

「（歌っている所見られたくなかったなあ、すっごく恥ずかしかった）」

「次回『別れと再会』」

お楽しみに

第6話 別れと再会（前書き）

新しい登場人物がいますので、紹介します

富山 みやな

（とやま みやな）

年齢：15歳

身長：144cm

出身地：北海道

血液型：AB型

家族構成：父、母、長男、次男、長女

胸ランク：中

好きなもの：麺類、冬、雪、ゲーム

嫌いなもの：夏、車

得意科目：体育以外

苦手科目：体育

好きな色：虹

家はすすき野のラーメン屋（テレビで時々出ている）
はくりょうとは4年前のゲーム大会以来の知り合い。
将来は自分の家のラーメン屋を継ぐ予定。

第6話 別れと再会

火曜日

今日は中学の卒業式

学校の教室

「今日で皆とお別れかあ」

「まあこなたとは高校も一緒だけどね」

こなたと話す私

今日でこの学校ともお別れである。

この教室から見る桜の木ともお別れである。

時間は経って卒業式終了後

「いやー不思議なカンジはするけど、思ってたより特別感動することもないねえ」

「普通そうでしょ？」

私はそれなりにジンときたけど

「だってほら、漫画とかだと卒業式って『感動のクライマックス！』ってカンジじゃん？何かあるかもって期待しちゃうんだよねー」

「まあ解らないでも無いけど」

「何かこの調子だとまた数年後にはよく覚えてなさそうな気が・・・ネ？」

「『ちゃんと覚えてる！』って言いたいけど、言われてみると私も小学生の卒業式余り覚えていないようなー？」

その後こなたと遊んだのは覚えているけど、あれ？

「ところでみどりんこの後の予定は？」

「何にも？こなたと一緒に帰るだけよ」

「（くそっーみどりんめえ・・・せつかく中学生生活の最後に彩を
と思って偽のラブレターを仕掛けたのに・・・あの様子だと机の
中見てないなー？）」

めちやくちやつまんない！！

「な、なによ？」

こなたは不満そうだったが、はくりようは全く気がつかなかった。

そんなこんなで卒業式を終え、泉家に帰宅した。

その夜

リビング

「春休みだし、たまにはランドでも行くか？」

お父さんがそういった。

「あっあのー？大変嬉しいですけど、私明日行くところがあるので
「行くところ？何処に行くの？」

「北海道」

はくりようがスラリつと言った。

「・・・・・・・・」

2人共開いた口が塞がっていない

「あついや！そのー、友達の所に行くだけで、心配しなくても良い
ですよ！費用はすべて私が持ちますし」

あわてて話す。

「とっ友達って誰？」

「4年前に知り合った友達よ。一昨年は向こうが此処に来たから、
今度は私が行くわけ」

「なるほどなあ」

「もっ勿論お土産買って帰るからね」

「うん、楽しみにしてるよ」

翌日

8:00

玄関

「それじゃあ行ってきます」

「「行つてらっしゃい」」

こなたとお父さんに見送られて家を出た。

その後電車を乗り継いで県の中心駅に向かう。

県の中心駅から新幹線と特急2本を乗り継いで北海道の大都市札幌に着いたのは、出発してから11時間以上経った19時前だった。

「寒いー！」

雪も降っている。

「確か『改札出た所で待っている』って言ってたからとりあえず改札に行こう」

エスカレーターで下に行き改札に向かう。

改札に向かうと声が聞こえてきた。

「みどりー！？」

この声、それと私の事を『みどり』と呼ぶ人は1人しか居ない。

「みやな！？」

近づくにつれて本人と確信した。

改札を出てみやなと抱き合った。

「久しぶりだねみやな！？」

「うん！！久しぶり」

抱き合うのを止めて向き合う。

「また縮んだんじゃ無い？」

「もお　！それは禁句！みどりが伸びたんだよー！」

背はこなた同じ位の身長。

でも私と同じ歳。

「ごめん、ごめん」

「んもー、それは置いというて」

置いというて良いのか？

「ようこそ北海道へ」

「うんっ！」

「さっ私の家に行こう」

外に向かう。

みやなの家は駅の近くらしく、歩く事にした。

「みどり、北海道の印象は？」

「やっぱり寒い事かな？雪も降っているし、此方（埼玉）では滅多に降らないし」

私は雪を目の当たりにしたのは初めてだった。

喋っているうちにみやなの家に着いた。

「こ、ここがみやなの家？」

「うん、そうだよ」

そこは大きなラーメン店だった。しかも長い行列ができている。

「裏口から入ろう」

「う、うん」

私とみやなは店の横にある脇道を通って裏口から家に入った。

「ただいま」

「お、おじゃまします」

玄関を入るとそこは厨房だった。

邪魔をする訳にはいけないので2階に行く事にした。

「なに食べる？」

みやなはエプロンを着始めた。

「うーん……それじゃあ店のオススメをお願いしようかな？」

「わかった」

そついうとみやなは下に降りていった。

10分後

「お待ちせー」

みやなが御盆にラーメン鉢を乗せて上がって来た。鉢からは湯気が上がっていた。

「うちの店のオススメのみそラーメンです」

おいしそー

「いただきます」

ズズズズズ

「おいしい？」

「うん！おいしい」

その後軽くラーメンを食べ終えた。

その後は2人でテレビを見たり、ゲームして盛り上がった。

PM10:00

みやなが疲れた顔をして上がって来た。

「ふあー」

「ど、どうしたの？」

「うん・・・、眠い」

「そう・・・もう寝るの？」

「うん、一緒に寝よう」

「いいよ」

パジャマに着替えてみやなの部屋に向かう。

翌日

私とみやなは朝市に向かいお土産を探していた。迷った挙句、海産物を冷凍便で送ることにした。

お昼からは市内を観光して1日を終えた。

その翌日

A M 1 0 : 3 5

この日には帰る予定になっていた。

みやなが駅のホームまで見送ってくれた。

「次、いつ会えるかな？」

「多分近い内には会えると思うよ」

「？」

私には何のことだか分からなかった。

理由を聞いて私は納得した。

列車の扉が閉まり発車した。

駅から遠ざかり、みやなが見えなくなっていく。

みやなは手を振っていた。

P M 9 時前

ようやく家の最寄駅に着いた。

改札を出るとこなたが迎えに来てくれていた。

その後無事に家にたどり着き、遅い夕食をとった。

ちなみにその後でお風呂上がりに体重計に乗ったら、
体重が キロ増えていた事は・・・内緒の話です。

第6話 別れと再会（後書き）

さーて次回の『みどすた』は？
みやなです。

ようやく出番が来ました。

正直嬉しいです。

次は入学式です。

天然とツンデレ、歩く萌え要素がようやく出てくるんですよ？

次回『入学式』

お楽しみに

第7話 入学式（前書き）

また新たな登場人物が出ます。

黒井 ななこ

（くろい ななこ）

年齢：25歳

身長：171cm

出身地：神奈川県

血液型：O型

利き腕：左利き

家族構成：1人暮らし

胸ランク：大

好きなもの：枝豆、ロツテ、ゲーム

嫌いなもの：しいたけ、中途半端な延長、臨時メンテナンス

好きな科目：世界史

嫌いな科目：英語

好きな色：白

こなたのクラスの担任。生徒を友人のように接する先生で、ややいい加減な性格だが、授業は真面目に行う。

天津 冬美

（てんしん ふゆみ）

年齢：24歳

身長：159cm

出身地：栃木県

誕生日：4月4日

血液型：B型

利き腕：両利き

家族構成：父、母、長男、長女、次女

胸ランク：中

好きなもの：サスペンスドラマ、漬物

嫌いなもの：車、オカルト、ホラー

得意な科目：数学

嫌いな科目：国語

好きな色：黄緑

はくりょうのクラスの担任。教師であるが、リーダー性がない。しかし運動会や文化祭等の行事にはリーダー性が強く、気がつけば生徒に混じっている事が多い。

P・S（作者より）

実際のらき すたとは違っています。

私が書いた中では最も長いです。

第7話 入学式

4月1日

AM7:30

今日は私の通う高校『陵桜学園』の入学式。

私は陵桜学園の制服に着替えて、入学式を楽しみにしていた。

カチャ

「あはよう」

こなたが扉を開けて入ってきた。こなたも陵桜の制服を着ている。

「今日入学式って事忘れていなかったわね？」

「私だって入学式位、忘れないよ」

「それじゃあ行こうか？」

部屋を出て、階段を下りて、玄関に向かう。

靴も指定靴なので、その靴を履く。

「おはよう」

「おはようございます」

お父さんがリビングから出てきた。

「いよいよ今日が入学式かあ？」

「はい、一時はどうなるかと思いましたが」

「私に感謝したまえ」

まあそれは感謝しているけどね

「それじゃあ行ってきます」

「いつてらっしゃい」

家を出て、家の最寄駅に向かう。

電車はさほど混んではいなく座る事にした。

陵桜学園は私とこなたの最寄駅から電車で20分、そこから歩いて5分程かかる場所にある。

学校の最寄駅に近づくに連れて、同じ制服を着た人が多くなってきた。

そして最寄駅に着き私達は列車を降りた。

改札に向かう途中。

トン。

こなたが都心から来た人とぶつかった。服からみて、陵桜の男子の服を着ていた。

「おつとごめん」

人とぶつかったが、こなたは倒れなかった。

「平気だよ」

じー……

「？」

こなたがぶつかった相手をじーつと見ていた。

「な、なに？」

「同じ高校……入学式……男子とぶつかった……これフラグたったかな？」

「……は？」

「（ちよ、こなた……初対面の人に一部の人にしかわからないことを……そろそろ教育が必要かな？）」

「……フラグ？」

「そう！入学早々こんな出会いがあるなんてね……着いてるよ」

ブチ！！

私の何かが切れた。

バキヤ！

こなたの頭を殴る。

「あいたたたた〜」

殴った所を抑える。

「それが初対面の人に言う台詞！？ほら行くわよ！！」

こなたの腕をひっぱり改札に向かう。

「ちょ、ひっぱらないでよ、暴力反対！！」

こなたは困っているようだけど、お構い無しにこなたの腕をひっぱる。

改札を出ると

「みどり〜」

聞き覚えのある声が聞こえた。

「おはようみやな」

なんとそこにいたのは1週間前に北海道で再会したみやながいた。しかも陵桜学園の制服を着ている。

「おー、君がみどりの話してた子かあ？」

「それじゃあみどりが話してた子って？」

「うん、そう」

話は1週間前みやなと分かれる時まで遡る。

「ど、どうということみやな？」

「私ねえ、両親共に陵桜出身なんだ」

「私が行く高校の？」

「それでねえ、幼い頃から陵桜の話とか聞いて、『通いたい』の思いがあつたの」

「そ、それで？」

「それでね陵桜を第1希望にしたんだ」

「そうなんだ」

「学校は『決めるのは本人次第』、家も『行きたかったら行つてきな』って事で通う事にしたの」

「な、なんという偶然」

私も両親共陵桜出身、幼い頃から話を聞いて『通いたい』と思っていた。

「でも、親から離れるから・・・」

「うん1人暮らし、家賃、電気や水道代は親が払ってくれるけど、『食費やその他は自分で稼ぎなさい』って」

「それってバイトって事だよな・・・？」

「うん大変だと思うけど、みどりが一緒なら楽しいと思うし」

「うん、私もみやなと一緒に楽しい高校生活になると思うよ」

振り返り終了

<通学路>

「友達が増えて私嬉しいよ」

「私もよ。あつ自己紹介してなかったわね、私は富山みやな。みやなって呼んでね」

「私は泉こなた。こなたでいいよ」

話しているうちに陵桜学園に着いた。

陵桜学園は1学年12クラス×1クラス40人＝480人というマンモス高。

私とこなたのように近場の人や、みやなのように遠い所から来てい

る人もいる。

私達はクラス分けの前にいる。しかし……

「やっぱりすごい人ねえ」

私たちの前にはクラスが何処か確認しようとしている人達で一杯だ。

「まるでコミケだね〜？」

「こなた？また教育が必要か？」

私は拳をこなたの前に見せた。

「うわ〜みどりん凶暴！！」

「ねえみどり、コミケってなに？」

「みやなは知らなくてもいいよ」

「？」

「しょうがない、掻き分けて行くか？」

「そうするしかないみたいだしね」

私達はクラス分けの前に群がっている人を掻き分けてクラス分けの名前が見える範囲まで来た。

「それじゃあ私はあっちから見てくるね〜」

こなたはA組の方に向かった。

「それじゃあ私達はこっちから」

私とみやなはM組の方に向かう。

M組から見る事にした。

M組には私達の名前は無かった。

順にK組、J組、I組、H組を見たが、私達の名前は無かった。

そしてG組

「あつ！私の名前！！」

みやなが喚起の声を上げた

「え？わ、私の名前……」

あわてて探す。

「あつたよ！みどり！！」

再びみやなが喚起の声を上げた

そこには『山村 白緑』の名前があつた。

「ほ、本当だ！」

喚起の声を上げた

だけどそこにこなたの名前は無かつた。

「こなたの名前無かつたね・・・」

「うん・・・」

私は落ち込んでいた。

こなたとは小学2年から同じクラス、まあ12クラスあるので同じクラスになるのは奇跡に近い。

その後こなたが戻ってきた。

「私D組だつた・・・」

「そう・・・」

2人共落ち込んでいた。

「ほ、ほら2人共元気だして!!」

みやなが必死に励ます。

「まあこれで、宿題写す時ばなくなるから、私はちょっと嬉しいけどね」

「突っ込みづらい雰囲気の人に余計な事いうなっ!!」

「（こなたつてKYなんだ・・・）」

こなたはD組、私とみやなはG組だつた。

「それじゃあ私達は教室に行ってくるから」

「いつてらっしやい」

2人を見送つた。

「さて、私も行きますか」

振り返ろうとした時、

トン!

誰かにぶつかつた。

「す、すいません!大丈夫ですか?」

「（さっきぶつかつた人とは口調が違う・・・それになんといつて

も胸の大きさ・・・明らかに女子だね・・・」

見上げると眼鏡を掛けていて、髪は胸の辺りまであった。

「大丈夫だよ、ちよつと悔しいことがあつてね」

「そういえば誰かと一緒にしたよね？ 駅から？」

やさしい口調・・・大金持ちっぽいね・・・

「うん、小学校の時から同じクラスだったんだけど、別のクラスになつちやて・・・」

「小学、中学同じクラスですか？それはすごいですね？」

「そうだけど、んまあ12クラスあるから、同じになることすら奇跡だけだね？」

「そうですね。あ、自己紹介が遅れましたね。私高良みゆきと申します」

「私は泉こなただよ、クラスはD組だから」

「よろしくおねがいします泉さん」

「よろしくみゆきさん」

あれ？なんで『さん』付けしたんだろう？雰囲気かな？

みゆきさんと別れてこなたも自分の教室に向かった。

< D組教室 >

「なんで『さん』付けしたのかな？」

みゆきさんつて結構ナイスバディだったなあ

「また会いたいなあ」

ふと教室の廊下を見るとドアが開いた。

「み、みゆきさん？」

なんとついさつき出会った人が教室に入ってきた。

「あら、泉さん」

「ど、どうしてここに？」

「私もD組なんですよ」

「そ、そうなんだ・・・」
「1年間よろしく願います」
「こちらこそよろしくね」

<その頃G組教室>

「こなた多分1人で寂しがつがてるでしょうね？」
「そうかもねえ」
「しょうがない、のぞいてやるか？」
「そうね、時間もあるし」
2人でD組に行く事にした。

<D組教室前>

「多分教室の窓から外を見てると思うよ？」
「こなたって寂しがりやなんだ？」
「うん、普段は元気すぎるんだけどねえ」
ガラッ

教室の扉をあける。

「こな・・・た？」

そこには誰かと喋っているこなたがいた。

「もう友達できたんだあ？」

「そう・・・みたいねえ？」

なんで私の思っている事と違う展開になるんだろう？

「おーみどりんにみやなちゃん、来てくれたんだあ？」

こなたが私達に近づく。

「うん」

「それよりもこなた、あの人は？」

こなたと喋っていた人を指差す。

「あつ私、高良みゆきと申します。貴女は確か駅で泉さんと御一緒でいたね？」

「えっ？どの当たりから見えました？」

「泉さんを殴った当たりからでしょうか？始めは中の良い姉妹に見えました」

「し、姉妹？私とこなたが？」

「ええ、本当に姉妹に見えました」

「（私とこなたが姉妹に？とても私には思えない・・・）」

「みゆきさんは1人っ子で、姉妹が羨ましいんだってえ」

「へえゝみゆきも1人っ子なんだ？」

「え？ということは貴女も」

「ええ私もこなたも1人っ子なの」

「（同じ1人っ子でもこんなに差があるんだ・・・）」

みゆきは明らかにナイスバディでなんだか優しそう。こなたは幼児体系で毒舌でオタク。私は・・・どうなんだろう？

「あつ自己紹介が遅れたね、私は山村はくりよう、はくりようは白緑つと書くわ、よろしくね」

「私は富山みやな、よろしくね」

「山村さんに富山さん、こちらこそよろしくお願いします」

その後色々喋っている内にチャイムが鳴った。

「それじゃあ私達は戻るから、次の休み時間また来るから」

「じゃあね」

私とみやなはD組を後にしてG組に向かう。

<廊下>

タタタタタ

向こうから走る音が聞こえてきた。

「ほら！走って！！」

「待ってよお姉ちゃん！」

「（姉妹・・・それとも双子かな？）」

1人はライトパール色の髪にショートカットで黄色のリボンをしている。

もう1人はこちらにもライトパール色の髪にロングヘアーでツインテールをしている。

まあ今は無視しておこう。

< G組教室 >

教室に入ると既に先生が来ていて、私達以外全員座っていた。先生は女性だ、

「その2人、座って」

「は、はい」

あわてて座る。

「私が1年G組担任の天津冬美です。1年間よろしくね」
まず先生が軽く自己紹介した。

< その頃D組教室 >

「先生遅いなあ」

「もうチャイム鳴ってますよね？」

クラスがざわついてくると何だか足音って言うか走ってくる音が聞こえてきた。

・・・ダダダダダダッ！ガラッ！

「皆席に着け！ハアッハア、間に合った。」

明らかにアウトでしょ。

「うちがD組担任の黒井や。まだ春休み気分が抜けんようやけど休み気分でおらんで頑張るように」
ドンッ！
机に倒れ掛かった。

（うわっ説得力ない！）

多分クラス一同そう思ったことだろうね。
先生の髪はボサボサだし明らかに先生が遅刻寸前だったようだし。
その後体育館に移動し、入学式を行った。入学式恒例の長い校長の話を終え、入学式が終了。クラスの戻った。

< G組教室 >

「早速ですけど、上半期のクラス委員長を決めたいと思います。誰がいせんか？」

「みどり確か中学校の時学級委員やっていなかった？」

「山村さん引き受けてくれませんか？」

みやなの話し声を聞いた先生が聞いてきた。

「別に私は構いませんけど・・・」

なぜか自動的に私が上半期のクラス委員長をやる事になってしまった。

まあ私は嫌ではないんだけど・・・

「私が学級委員を受け持ちました山村白緑ですよろしく願いします」

前に出て軽く挨拶した。

パチパチパチパチ

拍手が鳴り、少し照れる。

その後HRで無事クラス委員が決まって残った時間は、フリータイムとなった。

放課後

D組教室

「へえ、みゆきがD組の委員長なんだ？」

「はい、委員会でもよろしくお願いします」

なんとD組の上半期の委員長はみゆきだった。

「でもなんで委員長することにしたの？」

「小中と学級委員を受け持っていました、それでやってみようかと思ひまして……」

な、なんとという偶然……私も中学時代、学級委員を受け持っていた。

それをみやなが喋ってやることに……まあ嫌って言うわけではないけど……

「そろそろ帰ろつか？」

「そうですね」

私達4人は帰ることにした。

<通学路>

バスも通っているけど、みやなの家が近いので、歩く事にした。その最中、

「あれ？なんだろう？」

「ん？」

30m程前に私達と同じ陵桜の制服を着た女の子2人と外国人っぽい男性がいた。

よく見ると今朝廊下ですれ違った2人だった。

「まさか誘拐？」

「こなた考えすぎ！多分道を聞いているんだと思うけど・・・英語喋れないのかな？」

私達は女の子2人と男性の元に近づく、

「お、お姉ちゃん、なんて言っているのかな？」

「た、多分道を聞いているんだと思うけど・・・え・・・え」と

はくりようが割り込み英語で『どうかしました？』と聞く、

男性は『近くにコンビニはありますか？』と言った。

男性はコンビニを探しているようだ、

みやなの方を向き、

「みやな、近くにコンビニある？」

「ごつごめん、まだ住んだばかりだからこの辺の事はまだ知らないの」

再び男性の方を向き、

『すみません、この辺のことは知らないの』

『そうか、それじゃあ別の人に聞きます』

『すみません、お力になれなくて』

『別にいいよ』

男性はその場を去った。

「す、すごい！」

ショートカットの子が喚起を上げた。

「山村さんすごいですね？」

「べ、別に私は当たり前の事をしただけで・・・」
照れて顔が赤くなる。

「またあゝ、みどりん照れちゃって」

「う、うるさい!!」

正直嬉しいけど・・・、

「みどりは英検1級の免許を持っているんだよ」

「それはすごいですね」

「あ、ありがとう」

「助けてくれてありがとう、私は柊かがみ、こっちは妹のつかさ」

「始めまして」

女の子2人が挨拶をした。

「私は山村はくりよう、はくりようは白緑と書くわ、この子が私の友達のこなたとみやな、そして今日知り合ったばかりのみゆき、よろしくね」

「よろしく」

「よろしくね」

「よろしくお願いします」

私達も挨拶した。

その後みやなとは途中で別れ、みゆきさんは東京方面らしく駅で別れ、その後柊姉妹と別れた。

そして家の最寄駅に着いて降り、そのまま家に向かう。

「「ただいま」」

「おかえりどうだった？」

「友達が3人出来たよ」

こなたが指を3本出して顔は笑顔があふれている。

「そうか、それはよかったなあ、ご飯できたから着替えておいで」

「「はい」」

私とこなたは2階に上がり、それぞれの部屋に入った。

<はくりょうの部屋>

「春は出会いの季節とは言うけど・・・」

着替えながら今日のことを振り返る。

入学式の日にはクラスとうまく馴染めたり（委員長でいろんな人と話したため）、それに友達が3人も出来た。

悩みは姉妹をどう呼ぶかだけど・・・、普通につかさとかがみで良いよね？

まあ呼んでいれば慣れるか。

これからの高校生活、楽しくなりそう。

着替えを終え、下に降りて行った。

第7話 入学式（後書き）

さーて次回の『みど すた』
かがみです。

いやーようやく出番が来たか、
たく、作者の更新遅すぎるのよ！

って、文句言ってるの出番少なくなりそうだからこの辺で止めとく
か、

あれ？あの子どこかで見えたような・・・

次回『2年ぶりの再会』

お楽しみに

第8話 2年ぶりの再会（前書き）

新たな登場人物がいるので、紹介します。

峰岸 あやの

（みねぎし あやの）

年齢：15歳

身長：160CM

出身地：埼玉県

誕生日：11月4日

血液型：AB型

利き手：左利き

家族構成：父、母、長男、長女

胸ランク：中

好きなもの：お豆腐、餃子

嫌いなもの：辛いもの、煙草の煙

得意科目：国語

苦手科目：数学

好きな色：黄緑

かがみと同じクラス。中学時代は茶道部に所属していて、和服が似合う大和撫子。白緑とは、2年前に面識あり。

日下部 みさお

（くさかべ みさお）

年齢：15歳

身長：162CM

出身地：埼玉県

誕生日：7月20日

血液型：B型

利き腕：左利き

胸ランク：中

家族構成：祖父、祖母、父、母、長男、長女

好きなもの：ハンバーグ、ミートボール、太陽

嫌いなもの：こんにゃく、野菜、雨

得意科目：体育

苦手科目：世界史、数学

好きな色：黄色

あやの同様、かがみと同じクラス。中学時代は陸上部所属で、太陽が似合う女の子。あやのをよく頼っている。

P S（作者より）

テストや事情により更新が遅れました。

第8話 2年ぶりの再会

入学式から1週間

柊姉妹の呼び方はつかさ、かがみと呼ぶ事にした。

つかさ、かがみも私の呼び方を決めたようで、つかさは『みどちゃん』、かがみは「はくりよう」と呼ばれる事になった。

<学園最寄駅前>

「おゝす」

「おはよう」

つかさとかかがみが来た。

すでに私とこなた、みゆきは来ていた。

「「おはよう」」

「つかささん、かがみさん、おはようございます」

私とこなた、みゆきがはもる。

「あ！みどちゃんポニータールにしたんだ！」

「うん」

「でもどうして？」

「まあ単純な理由で・・・w「みどりんが好きな俳優さんがポニータールなんだって」大事なこと言うな！！」

まったくこなたは・・・、

「あれ？みやなは？」

かがみがみやながいないのに気づいた。

「そっいえばいないね？」

「どうしたのでしょうか？」

その時走ってくる音が聞こえてきた。

ダダダダダダッ！

「ごめん！遅れたー！！」

みやなが息を切らしてこっちに向かって来た。

「富山さんどうかしましたか？」

「弁当作っていたら、こんな時間になってしまっ……」

「そうだったの？」

「全員そろったし、行こうか？」

私達6人は学園に向かって歩いた。

時間は経って昼休み

< G組教室 >

弁当を持って廊下に出ようとすると

「こなたのクラスに行くの？」

みやなが聞いてきた。

「うん、みやなも行く？」

「行くに決まってるでしょ？」

みどり以外友達いないし、

私とみやなは教室を出た。

< E組教室前 >

「きゃっ！！」

急に出てきた人とぶつかった。

「だ、大丈夫？」

「大丈夫かあやの？」

みやなと誰かがはもった。

「むっ！！」

お互いを睨み合い火花が散る。

「お、落ち着いてみやな」

「落ち着いてみさちゃん」

今度ははくりようとさつきとは違う人がはもった。

「「本当にごめんね、みやな（みさちゃん）むきになる性格で・・・」

「」

再びはもってお互いを見つめて、

「（あれっ？この子どこかで見たような・・・）」

「「あつあの～？どこかでお会いしましたよね？」」

またはもった。

2人とも見覚えがあるようだ。

「（この子どこかで・・・）」

「（ポニーテールを解いたら・・・）」

シュッ

女の子が私のポニーテールを解いた。

「やつぱり！！祭りの時、財布拾ってくれた子ね！？」

「それじゃあ・・・財布落としたの貴女だったんだ？」

やつぱりあの時の子は貴女だったんだ。

「ん？あやの知り合いか？」

「みどり？知り合い？」

またはもった

「まあちよつと」

「すれ違っただけだけど・・・」

この子と出会ったのは、2年前の夏

<2年前>

この日は、本来なら母と一緒にショッピングや食事をする予定だったが、急な用事が出来たため中止になった。

こなたも朝から出掛けており、遊べない。

家で1人で過ごそうと思つてたけど、隣町で縁日があるのを聞いて、着物に着替えて行つてみた。

<隣町の縁日場前>

「うわぁー！！混んでるねえ」

もの凄い人ごみで、友達と来ていたらはぐれそうになるほど混んでいた。

「ひとまず、回ろうか」

とりあえず縁日を一回りする事にした。

<1時間後>

「うわっ！！なんでこんなに！？」

さっきよりも混んできた。

「これ以上此処にいるのは危ないし、帰るか」
混んでるのは嫌なので、帰ることにした。

その途中

ガシャ、チャリン

「ん？」

何の音？

足元を見ると布袋が落ちていて、柄的に女の子の物だった。拾ってみると、お金の音がした。

「誰が落としたのかな？」

ひとまず落とした人を探すことにした。

「困っているだろうなあ」

落とした人を探していると、声が聞こえてきた。

「あ、あれっ？おかしいなあ」

「どうしたあやの？」

「さ、財布が……」

どうやら財布を落としたようだ、もしかしてこの子かな？

「あの……？もしかして、これじゃありませんか？」

布袋を女の子に差し出す。

「あ！それ！！拾ってくれたんだあ！！」

「うん、『困ってるだろうなあ』と思って」

女の子は布袋を受け取って嬉しそうだった。

「ありがとう！！……あなた、やさしいのね」

「やさしい？」

「だって、普通落ちているお金ってそのまま黙って持ち帰らない？」

「私は交番に届けるかな？今日は持ち主を探していたら偶然あなたが、財布を落としたように見えて、『もしかしてこの子かな？』と思って」

「まあ財布が戻ってよかったじゃんあやの？」

この子はマイペースな子だね、

「うん、それじゃあ私達はこれで」

「バイバイ」

振り返ると、女の子はまだ手を振っていた。

私はその場を去って家に帰った。

< E組教室 >

「へえー、そうだったんだあ！！」

「そういえば、そんなことあったなあ」

私達4人はE組教室でお昼御飯を食べている。

「そういえば、自己紹介していなかったわね、私は山村白緑、こっちは富山みやな」

「よろしくね」

「ウチは日下部みさお」

「私は峰岸あやの、よろしくね」

「そういえば、E組ってかがみもE組だったよね？」

みやなが2人に聞いた。

「う、うん柊ちゃんも同じクラスなんだけどね……」

「中学から数えると、3年連続なんだけどなあ」

「さ、3年連続!？」

小学、中学で連続はありえるけど、中学、高校では聞いた事無い。

「みやなは向こう（北海道）で同じ子と何年位同じクラスになった事ある？」

「うーん……幼稚園の頃から11年間同じクラスだった子がいたかな？」

「……じ、11年間!？」

その数字に私もあやのもの、みさおも驚いていた。

「私が引越さなかったら、12年間連続だった可能性も、あったんだよね」

「……じ、12年!？」

再びその数字に驚く、

「でもどうして、引越したんだあ？」

みさおが聞いてきた。

「家、元々ラーメン屋で移転するために引越したの」

「へえー、富山さんの家ってラーメン屋さんなんだ」

「行ってみたいなあ」

「それは……、ちよつと無理かも」

楽しいムードだったが、みやなが暗いムードに変えた。

「ええー!?なんでだよ!!」

「わ、私の家は北海道だから……」

「な……、納得」

どうやら、納得したようだ……、

「でも富山さん、どうしてわざわざ陵桜に？」

「両親が陵桜出身で、小さい頃から『行ってみたい』と思っていたの」

「へえ、そうだったの？」

話しているうちに昼休み終了のチャイムがなった。

慌てて私とみやなは自分の教室に戻った。

<放課後>

放課後に委員会があつたため、かがみと途中駅まで一緒に帰ることにした。

その途中

「ねえかがみ」

「なに？」

「今日E組で、峰岸と日下部って言うこと話したんだけど」

「峰岸と日下部……どっかで聞いた事あるような……」

かがみが考え込んでいる。

「中学から同じクラスって聞いているけど……」

「え……あ、あれ？」

「もしかして、全然覚えていない？」

「あ、いや、中学時代いたのは覚えているんだけどね……同じクラスだったかは……」

「覚えてあげようよ、同じクラスなんだから……」

「う、うん……」

正直この時、かがみとあやの、みさおは友達なのか疑った。

しかも翌日、休み時間にE組を覗いてみたら、かがみの姿はなかった……。

第8話 2年ぶりの再会（後書き）

さーて次回の『みどすた』は？
あやのです。

山村ちゃんのおかげで背景にならずにすんで正直嬉しいです。
ありがとう、山村ちゃん。

次回『峰岸家 初訪問』
お楽しみに

第9話 峰岸家 初訪問（前書き）

遅れて申し訳ないです。

更新速度を上げなくては・・・、

第9話 峰岸家 初訪問

GW最初の日。昨日からみやなの家泊まり、宿題、休み明けのテストに向けての勉強をしようと思ったが、みやなのバイトの関係で、今日は夕方まで1人で勉強しているはずだった……

ガタン、ガタン

私は電車に揺られて、ある場所に向かっている。

「そういえば、あやの家に行くのって初めてよね？」
「どんな家だろう？」

私の向かう駅はあやの家の最寄り駅。
なぜあやの家の家に向かうかは昨夜、あやのからの電話を受け取るところまでさかのぼる……

「勉強会？」

『うん、宿題と一緒にしない？山村ちゃんって勉強得意だったよね？』

自己紹介で述べたように、勉強で苦手な事は無い。強いて言うと、美術がちよっと苦手な程度。

「私は構わないけど、分からない所でもあるの？」
成績は提示版で見た程度ではあるが、あやのの順位は真ん中位だった。

『うん、数学が苦手だね、それにもうひとつ問題があって……』

「もうひとつ？」

「なんだろう？」

『みさちゃんなんだけど、めんどくさがりで、私じゃあ手に負えなくて』

頑張れば、結構出来るんだけど・・・、

「なるほど（汗）・・・、確かにみさおはちょっとヤバイかもねえ？」

これも提示版で見た程度だけど、みさおの順位は下の方だった。

「まあ、上手く教えられるかは分からないけど私でよければ手伝うよ」

あやのが困っているし、見捨てるわけには行かない。

以前あやのから聞いた話だと、みさおは頑張れば結構出来るみたいで、上手くエンジンを掛けられるかが力ギだな・・・、

明日の集合時間と場所を確認して、必要な筆記用具、教科書、ノートを準備しておく。

そして、寝る前にふと気がついた。

「高校で出来た友達の家に行くの初めてじゃない？」

こなたは転校した時から、みやなは中学の時に知り合ってから友達で、こなたの家では、居候させてもらっていて、みやなの家では、今泊まっている。

みゆき、柊姉妹の家はまだ行っていない。

どんな家なのか、気になってなかなか眠れず、いつも6：30に起きるのだが、目が覚めたときは7：00を回っていた。

慌てて寝癖を直して、朝食を取る。みやなから予備の鍵を受け取り、みやなを見送って、少々宿題をする。

大体の時間で家を出て、集合の場所に向かう。

集合は鷺宮駅に10時。

< 鷺宮駅 >

9:50

「着いた」

駅に着き両足を同時に出し、ホームを歩き改札口に向かう。

改札口に向かうと、声が聞こえた。

「山村ちゃん」

あやのがいた。

「おはようあやの」

あやのの服は可愛いワンピース。でも勉強会に着る服だろうか？

「今日はわざわざありがとう」

「あ、いや今日は暇だったし」

それより、あやのとみさおのためなら、私で出来る事なら頑張りたい。

「それじゃあ行こうか？」

「うん」

私とあやのは勉強会が行われるあやのの家に向かった。

あやのの家

「お邪魔します」

「おお、いらつしやい」

みさおが出迎える。服は、トレーナーにジャージ、まあ楽な格好だ。

「山村ちゃん、ちよつと待っててね」

「ん？どうかしたの？」

「ちよつと着替えるから・・・」

「え？それじゃあその服、私を出迎える為にわざわざ着たの？」

「そうだけど・・・」

やっぱりそうだったのか、

「別にいいよ、友達なんだから」
「でも、初めて家に来るんだから、『おめかしでもしておこう』と
思って……」

あやのは、気遣いが強いのかな？
そう思っているうちにあやのは、上に上がっていった。

<10分後>

あやのは、楽な格好をして、戻ってきた。

「それじゃあ山村ちゃん、今日はよろしくね」
「うん、こちらこそ」

「はあ、試験の前って急にいつもやってる部活が無くなってやるこ
とないんだよねえ」

「だから勉強するんでしょ？」
そのためにはあるんだし……

「いや、それは分かるんだけどあ？普段部活している時間が自由
だと『ちよつと違う世界が見える』って言うかね？そう考えると勉
強なんて、勿体なくてできねえじゃん？」

そわそわ、わくわくしてさあ？

「とりあえず、目的はみさおのためにやるんだから」
自覚してよ、今日の勉強会は、

その後3人そろって、あやのの部屋に移動して、勉強会を開始した。

<30分後>

「疲れた」

「はやっ!？」

早すぎでしょ？

「少し休憩しようよ？」

「目的意識が無いから集中できないんじゃない？」好きな事やるのと嫌いな事やる差見たいに・・・

「将来の夢とかないの？」

「夢か？」

うーん・・・

「『将来の』つと言うわけじゃあないけどこの時期って宝くじでも当たって『楽に生活できねえかな？』とか思わない？」

なんかだるくって・・・

「あやの？あの子なんかならない？」

まるでこなたみたいだ・・・

「頭使うときはやっぱ甘いものが必要だぜ！」

「宿題終わったら、この前作ったお菓子出してあげるから」

頑張ろうよ

「あやのお菓子作るんだ？」

「味の保証は出来ないけど・・・」

「いや！味良しよりあやのはまいうーだぞ」

「（『勉強めんどくさーい』『みどりー夕飯できたよー』）」

「『どうしたの？』」

「あつ、いや・・・、類友とは思わないけど・・・『友達って似たタイプが多いなあ』』と思って・・・」

その後無事に今日の分を終え、あやのの部屋でお菓子を食べながらお喋りをしている。

ちなみにみさおから見たら私の1日分は、2日分に当たるみたい・・・

今話しているのは部活動の話

「へえーみさおは陸上部、あやのは茶道部に入っているんだあ？」

「うん、山村ちゃんは部活動何に入っているの？」

「えっ！？わ、私！？」

不意を突かれた。

「中学まで剣道部に入っていたんだけど、私は『勉強の方が合ってる』と思って……部活は入ってないの」

他にも理由あるけど……、

「そうなんだ？」

その後お喋り会は気が済むまで進み、みさおが帰ると同時に、私も帰ることにした。

私は今、帰りの電車の中

「ふう〜」

ため息を出して、今日を振り返る。

「やっぱり……、友達は多くいるべきね」

小学時代は友達といったら、こなたしか居なかった。

もう1人いるけど……、

その後、無事にみやなの最寄り駅に着き、無事にみやなの家に着いた。

みやなは、

「私も行きたっかたなあ〜？」

と愚痴をこぼしていた。

第9話 峰岸家 初訪問（後書き）

さうて次回の「みどすた」は？

つかさです。

ふえくん出番がすくないよ

えっ？次回出番あるの？

じゃあ、はりきっちゃお

かがみ「今回はあんたのためにやるのよ？」

ううう分かってるよ

次回『柊家 初訪問』

お楽しみに

第10話 柊家初訪問（前書き）

新たな登場人物がいるので紹介します。

柊 みき

かがみ、つかさの母親。

4女の母親だが、見た目は20代にしか見えない。

柊 いのり

柊家の長女。会社員。ときどき巫女になって神社を手伝っている。
母親に似ている。

柊 まつり

柊家の次女。大学生だが、勉強のほうであまり妹達に信用されていない。

作者より

お、お待たせしました。

第10話 柊家初訪問

【柊家】

GWも明日で最後の夜。

かがみとつかさは居間でTVを見ている。

面白いのか、笑っている。

居間に男性が入ってきた。

お父さんだろうか……

「2人共、明日で連休最後だけど、宿題は済んでいるのかい？」

「じ、実はまだだったり……」

長い休みつてどうしても遊んじゃうよね……

「困っちゃったね、ねえ？お姉ちゃん」

「……ゴメン私もうほとんど終わってる……」

夜とかに少しずつやってたし、

え？休み中ずっと一緒に遊んだのに？

【その頃泉家】

カチャカチャ

こなたが部屋でパソコンに夢中になっている。

コンコン

ドアを叩く音がした。

「誰？」

「私よ、白緑」

「どーぞ」

カチャ

こなたの部屋に入る。

「どうかしたの白緑？」

「あんたも出されたはずよね？」

「な、何を？」

「すっかり忘れてるわね？宿題出されたはずだけど？」

「・・・・・・・・」

忘れてた・・・・・・・・

「はぁー」

本当にこの子（こなた）は・・・・・・・・

「宿題出しなさい、やってあげるから」

「いつも悪いね、それじゃあ頼むよ」

他人から見たら不思議な行為だが、私とこなたから見たらいつもの事で、連休や夏休みの終わりには私に泣きついて頼んでくる。

渋々やるのだが、やる私の身もなってほしい・・・・・・・・

1、2日でやるの大変なんだから・・・・・・・・

「やってほしいなら早く頼みなさいよ？」

「ゴメンゴメン」

髪をかいて謝るこなた。

私はこなたの部屋から出て私の部屋に入る。

「さてっ、始めようか」

机に向かいこなたの宿題を始める。
見ると1問すらやっていない。

「はあー」

呆れてため息を出すも、作業を始める。

その時・・・・・・・・

トルルルル、トルルルル

私の携帯が鳴った。

画面には『柊家』と出ていた。

以前私の携帯番号を教えた代わりに、柊家の電話番号を教えて貰った。

「もしもし」

『あつ、はくりよう?』

かがみの声だった。

「かがみ、どうしたの?」

『はくりよう、明日は空いてる?』

「空いてるけど・・・・・・・・」

何か用事でもあるのかな?

『それじゃあ明日家に来てくれない?』

「えっ? な、なんで?」

『うん、ちよつと手伝ってほしい事があって・・・・・・・・』

「な、何を?」

『宿題の答え合わせを兼ねて勉強会をしようと思って・・・・・・・・』

「答え合わせか・・・・・・・・別に良いけど、何で手伝ってほしいの

？」

『実はつかさの事何だけど．．．．．あの子の宿題全然出来ていないのよ』

「な、なるほど．．．．．」

それで手伝ってほしいのか．．．．．

「分かった良いよ私でできる事なら」

『ありがとう、それじゃあ明日頼むね』

お礼を言って電話は切れた。

「そうすると、こなたの宿題どうしよう．．．．．」

もう私の宿題は終えてるし．．．．．

「しかたない、持って行くか．．．．．」

私はこなたの宿題を持って行く事にした。

【翌日】

AM 6：50

「うゝん」

昨日は2時までこなたの宿題をやっていた。

「初めて夜更かししたね．．．．．」

体が重く、思うように動かない。

寝たいけど、今日は料理当番なので、キッチンに行って朝御飯を作らなくてはならない、

「しかたない．．．．．」

眠気をこらえてキッチンに向かう。

朝食を作り終え、朝食を取る。

その後、時間を空いてかがみの家に向かった。

AM10:00

「にしても……………」

私が今いる場所は神社の鳥居の前

何でここにいるのかは、ある理由がある。

「まさか、私とあやのとみさおが出会った神社が柊家の神社だったなんて……………」

この神社はお正月には初詣、夏には夏祭りがあり、にぎわう神社であり、柊家はそれを司る家柄。

「なんか……………運命を感じるわね」

私は神社を後にして柊家に向かった。

【柊家の前】

「ここ……………よね？」

表札には『柊』とかいてあるから多分ここだろう

ピンポン

インターホンを鳴らす。

しばらく立つとドアが開き、中から女性が現れた。

「はーい、あら？あなたがかがみとつかさのお友達？」

「あ、はい。始めまして。山村白緑と申します」

「とうぞあがつて、かがみ、つかさ、お友達が来たわよ」

「はーい」

お姉さんに呼ばれてかがみが玄関にやってきた。

「いらっしやい白緑。今日はワザワザごめんね？」

「あつ、いいよ、今日は家でゆっくりしているつもりだったし・・・、別に構わないよ」

「今つかさがクッキー焼いているの。もうすぐ出来るから先上がって」

「2人ともずいぶん張り切ってたものね？」

「ちよつとお母さん！？変なこと言わないでよ！」

「へ・・・？」

今お母さんて言ってたわよね？

見た目若すぎ・・・

「白緑どうかした？」

「あ、いや・・・」

私のお母さんもそうだけど・・・、年齢と見た目ってすごい差があるのよね・・・

「お母さんみてビックリした？」

「はい・・・」

私の驚いた顔を見て柊母がなにやら嬉しそうだ・・・というか考えた事ズバツとあてられた（汗）

かがみは何がなんやらという顔をしていたが気を取り直して私を部

屋まで案内してくれたが・・・。
どこからか視線を感じるのはなんでだろう？

【かがみの部屋】

「にしても、かがみの部屋って私の部屋と似ているわね」

所々にぬいぐるみがあり、

違うのは、小説らしきものが結構並んでいる・・・かがみは読書が好きなのかな？

私の部屋にはテレビがあり、無い分広く感じる。
広さは私の部屋と同じくらいかな？

「そうなの？じゃあ次勉強会する時は白緑の部屋でやりましょう」
「・・・」

別にいいんだけど・・・こなたが邪魔するから、私の部屋でするのはちよつとねえ・・・

「どうしたの？」

「うんちよつとね・・・」

私はこなたについて話した。

「・・・」

かがみは驚いた顔をしていた。

その証拠に開いた口が塞がらないようだ・・・

「それでテスト大丈夫なの？」

「あの子、一夜漬けが得意みたいで……、成績は上位に入ってるし」

「えっ？う、嘘？」

また驚いていた。

「みどちゃんいらっしやうい、クッキー焼けたよ」

「あ、お邪魔しているね、ありがとう」

そこにつかさが焼きたてのクッキーを持って来てくれた。
美味しそうな香りが部屋いっぱいに広がる。

「それじゃあ1つ……美味しい！」

「ありがとう、たくさん作ったからいっぱい食べてね」

この前あやの家でお昼食べたけど、その時出された料理も美味しかったし、

みやなも料理上手だし、こなたもそうね、この4人で料理対決したらどれが1番になるのかな……

そう考えている内に勉強会は始まった。

「みどちゃんほどの位やったの？」

「もう終わってるよ、私はかがみさんと答え合わせしながらつかさの指南役」

「え、そうなの？みどちゃん頭良いんだ」

「感心してる暇があるならちゃっちゃと始めなさい。分からない所は教えてあげるから」

そう言って勉強会開始

勉強中も視線を感じるのはなんでだろ？

【昼食後】

午前中で答え合わせが終わったので、私は鞆からこなたの宿題をだす。

「あれ？白緑それは？」

「これはこなたの宿題頼まれちゃって……」

「あの、白緑……こなたの宿題はこなた本人がするものじゃあ……」

かがみが正しい答えを言う。

「うん、そうなんだけど……こなたには色々お世話になってるし……これは私からの『お礼』見たいなもので……」

必死に講義する私

「まあ、白緑が良いなら私は文句は言わないけど……」

かがみはつかさの指南に回った。

私はこなたの宿題を始める。

「ん？」

ふと見ると部屋の入り口が微妙に開いてる。

よく聞くと誰かがヒソヒソと話をしてるようだが……？

「結構可愛い子ね」

「まつり……いい加減覗きなんてやめたら？」

「そっという姉さんこそかなり乗り気だったじゃない？」

「別にそんなじゃないわよ。ただかがみ達が知り合ったばかりの友達を呼ぶなんて今まで無かったから少し気になっただけで・・・」
キイツ。

「あ・・・」

「えゝと・・・何をしていらっしやるのですか？」

なんとなく怪しい雰囲気をかもし出していたから、気づかれないように無言で入り口を開けてみた。

そこには2人の女性がやつぱり怪しい体勢で、何だか覗き見をするような・・・。

ひょっとしてここに来たときから感じてた視線って・・・？

「お、お姉ちゃん達！？何やってのよそんなところで！」

突然の出来事にかがみが慌てふためくが、別にやましい事をしてるわけじゃないし。

ちなみにつかさは事態を飲み込めずキョトンとしてる。

「あ、あはは。気にしないで続けて。どうぞごゆっくりー！」

「あ、こらまつり！もう・・・邪魔してごめんね？」

そういつて2人は下に（まつりと呼ばれた方は逃げるように）降りていった・・・。

事態は把握したもののさすがに反応に困る。

「今の2人はお姉さん・・・？昼間はいなかった様な気がするけど。」

「そうよ。まったくも、まつり姉さんはともかくいのり姉さんま

で何やってんだか。」

昼間いなかったのは家の手伝いをしてて昼食時間がずれたとか。しかし6人家族とは聞いていたけどかがみにつかさ、そこに姉が2人……。親父さんは肩身が狭そうね……。

「はーうらやましいわね……」

「何が？」

「こんなに家族がいる事よ、私1人っ子だったし……」

「そうなんだ」

「それに……。お父さん小さい時亡くなってるし、お母さんは私の為に仕事で頑張ってたし、『家族の温もり』って私知らないのよね……」

「「え……。？」」

暗いムードが部屋中を包む。

つかさも事態に気づいた。

「「ご、ごめん……」」

「いいよ、もう慣れてるし……」

【PM5:00:柊家】

その後は何事も起こらず、勉強に集中できた。

こなた、つかさの宿題も無事に終わる事が出来た。

「えーつと……。それじゃあお邪魔しました。」

玄関先でなぜか4姉妹そろってお見送りしてくれた……。私、そんなに何か気になるようなことをしただろうか？

逆に恐縮してしまう。

「またいつでも遊びに来なよ」

「まつり！あんまり白緑ちゃんを困らせないの」

「そうよまったく・・・また明日ね？」

「宿題教えてくれてありがとう。またね」

「はは、ありがとうございました。それじゃあまた明日！」

お辞儀をして柊家を後にする。

長くて疲れたけど・・・その分楽しく過ごせた。

こういう勉強会ならいくらでも大歓迎。

これからの学園生活は退屈はしないと確信しつつ帰路についた。

その後の中間テストの結果・・・

「山村さん、頭良いですね？」（学年トップ5入り）

「そ、そんな事ないですよ・・・」（学年1位）

「もう、照れちゃって・・・（みやな）」（平均80点半ばくらい）

「が、頑張ったよ・・・」（平均60点）

みゆきは頭良いみたい。

つかさは・・・次も頑張ろうね？

けど・・・

「おかげさまでバツチリ」(平均80点前後、最高100点)
「こなたの結果だけ納得できない・・・」(平均95点前後)

私もかがみと同意見である。

第10話 柊家初訪問（後書き）

さして次回の『みどすた』

みやなです。

もうすぐ白緑の誕生日です。

えっ？

その前にこなたの誕生日があるの！？
何かお祝いしなくちゃ、

次回『蒼髪色の誕生日』

お楽しみに

第11話 蒼髪色の誕生会 前編（前書き）

小早川 ゆい

（こばやかわ ゆい）

年齢：24歳

身長：166cm

出身地：埼玉県

誕生日：10月7日

血液型：A型

利き手：右利き

家族構成：父、母、長女、次女

胸ランク：大

好きなもの：おせんべえ、野菜炒め、古いゲーム

嫌いなもの：一部の野菜（とくにトマト等）

得意科目：道徳

苦手科目：数学

好きな色：青

こなたの従姉妹できよたかさんと結婚する前（1年前）でまだ独身

小早川 ゆたか

（こばやかわ ゆたか）

年齢：13歳

身長：138cm

出身地：埼玉県

誕生日：12月20日

血液型：A型

利き手：左利き

家族構成：父、母、長女、次女

胸ランク：極小

好きなもの：温かいもの（うどん等）、動物

嫌いなもの：牛乳、攻撃的な人

得意科目：国語

苦手科目：体育

好きな色：桜

こなたの従姉妹。背が小さい事をコンプレックスにしている。

作者より：2ヶ月更新しなくて申しわけございません。

しかも改名までしてしまつてまことに申しわけございません。

第11話 蒼髪色の誕生日 前編

6月に迫ってきたある日

【1・E】

「そういえば……もうすぐこなたの誕生日ね……」

「そうなんだ？」

「あれ？……白緑と近いじゃない？」

「へえ、そうなんだ？白緑ちゃんの誕生日って何時？」

「6月6日、みさおとあやのは何時？」

「私は7月20日」

「私は11月4日」

みさおは7月20日、あやのは11月4日か……

というか、みさおは本当に太陽が似合うね……

ちなみにみやなは1月1日である。

「ねえ？何をプレゼントしたら喜ぶかな？」

「大体分かるでしょ？」

あの子の事良くみれば？

「そ、そうね……それじゃあ好きな食べ物？」

「『鶏肉は好き』って言ってたから、鳥料理はどうか？」

「それじゃあ『鳥の唐揚げ』はどうか？」

「良いわねそれにしたら？」

「うん、そうする」

「それじゃあ私はケーキを作ろうかな？」

「プレゼントは……」

こうしてこなたの誕生日の行程が練られていった。

5月28日(土)

【みやなの家】

P M 2 : 0 0

「ふー出来た」

テーブルには直径20cm程のチョコレートケーキがあり、真ん中には『こなた お誕生日おめでとう』、周りはチョコホイップでデコレーションされていた。

「上出来ね」

「こなた絶対喜ぶよ」

「でなきゃ作った甲斐が無いわよ」

朝5時から起きて、生地を焼いて、クリームを泡立てて、デコレーションをしてもう大変だった。既に疲労はピークを迎えていた。

でもこなたの喜ぶ顔を見ないと思うと力がわいてくる。

「さて、行こうか」

ケーキを箱に入れて家を出る。

駅に行き列車に乗りうとした。

すると・・・

ピッピッ!!

「ん？」

振り向くと青い車が止まっていた。

「やつほー白緑じゃん？どうしたの？」

「あつゆい姉さん」

「だ、誰？」

「こなたの従姉妹のゆい姉さん」

「そ、そうなんだ・・・」

テンション高いわねこの人・・・

「あ、そくだゆい姉さん今から帰る所？」

「ん？そうだけど？」

「こなたの家まで送ってくれない？今日こなたの誕生日でこなたの
家に行く所なの」

「そっか今日はこなたの誕生日か……………」

月日が立つのは速いねえ……………」

「OK！！後ろに乗って」

「ありがとう」

私とみやなは後ろに乗る。

ブロロロ

「ところで白緑、その箱は？」

「これはこなたの誕生日ケーキ、朝から作ったの」

「それはご苦労だったねえ……………」

「あ、申し遅れました。私はみどりの友達の富山 みやなです」

「よろしく」

「ゆい姉さんは職業何をしているのですか？」

「ん？警官だよ」

「婦人警官かあ……………」

「警官といっても色々あるんですよ？」

「そっいえば『警官』ってさまざまな部課があるのは知っているけど……………」

「なにがあるのかは知らない……………」

「ん？そうだね、まあ私が勤めているのは『交通安全課』という所
だよ」

「へえー」

呑気に自己紹介をしているみやなとゆい姉さん。すると・・・

ブオォーン

猛スピードで車が通り過ぎた。

「うわぁ！速！！」

「ああいう車があるから事故が絶えないんだよね・・・」

「・・・このヤロウ！」

なぜかゆい姉さん目の色が変わっていた。

「えっ？ちよっ？ゆい姉さん？」

「2人共、シートベルトちゃんとつけてるよね！？」

「い、いやゆい姉さん！？仕事巾じゃあないんだからってうわぁ」

「きやあ～～！？」

突然アクセルを踏み込み、猛スピードで先程の車を追いかけ始めた。
いやな予感が的中！

メーターは見えないけど間違いなく100KMは超えていそう・・・

「ゆ、ゆい姉さん！？私ケーキ持っているんですけど？」

「私の走りの前に的はな～い！！」

前を走ってるほかの車や対向車を絶妙ついや紙一重で次々にかわし、
信号もギリギリで走り抜けて・・・てコレでいいのかな？

「ダメだ．．．．．全然聞いてない．．．．．」
みやなの方に目を向ける。

「み、みやな大丈夫．．．って！」

みやなはもう目を回していた。

「も、もうダメ」

みやなはすでに錯乱状態。

ああ．．．私も．．．限界．．．目眩が．．．眠気が．．．

「．．．．緑！白緑！もう着いたよ」

「．．．うん」

目を覚ますとそこはこなたの家の前だった。

「疲れて寝ちゃったのかな？みやなも起こしてくれる？」

確かに疲れていたけど．．．間違いなく原因はゆい姉さんあなたです。

横を見るとみやながまだ気を失っていた。

「みやな、着いたよ？」

「ふえ？着いたの？」

とりあえず車から降りて立ってみる．．．まだ地面が揺れてるよう
な気がする．．．。

ゆい姉さんは1度家に帰るそうで降りた後すぐに発車した。
坂の上で車が宙に浮いたように見えただけど．．．

「あっ！け、ケーキは．．．」

箱を開けると、ケーキは何事も無かったかのように無事だった。

「ふう良かった・・・」

「と、とりあえず中に入ろうか・・・」

「う、うんそうだね・・・」

ガチャ

「こなた〜？来たわよ〜？」

「おおいらっしやい〜」

こなたが階段を降りて来て私達を迎える。

「おお！？それはもしかして手作りケーキ？」

「うん、みどりが朝5時から作っただよ」

みやなが私の変わりに代弁する。

「だからみやな！！私が言いたい事言わないでよ？」

「お〜お〜みどりんは照れ屋ですな〜？」

「う、うるさい！！」

パシッ、バキヤ

2人を暴力ではあるが、叱った。

「ご、ごめんみどり、私調子に乗って・・・」

「分かればいいのよ・・・痛かった？」

「う、うん大丈夫・・・」

みやなが謝罪した。

私は笑顔で叩いたところをなでなでする。

「あ、あのみどりん・・・この差は？」

みやなは頬をビンタされただけが、こなたの頭には大きなコブが出来ていた。

「なんか文句ある！？（怒）」

「い、いえなにも!!」

鬼の形相の用にこなたを睨めつける。
みやなはクスクスと笑っていた。

その後リビングに移動し、ケーキを冷蔵庫に入れる。

「ねえみどり? こなたの誕生会何人来るの?」

「えっ? え」と私とみやな、こなたのお父さん、ゆい姉さんと・・・

「

「後はゆーちゃんだね」

「ゆーちゃん?」

「ゆたかの事ね・・・でも来るかどうかはまだ分からないのよ」

「え? どうして?」

「ゆーちゃん体弱いからね・・・」

「そうなんだ?」

私もゆたかを見たのは4回あるけど、その内3回は体調を崩して寝
ていてハッキリとは見ていない。

でもお互いの顔と名前は覚えている。

「さて、私は料理するから、2人は遊んでいいよ」

みやなはエプロンと三角巾を着てキッチンに向かった。

「さてこなた、私達は何をする?」

よし、それじゃあ狩をしよう!!

【こなたの部屋】

現在モ 八 中

こなたは上級者

私は最近なれてきて中級者

というか・・・こなたのプレイ時間は私の4倍以上・・・

『いつやっているの?』と思う位やっている。

私は勉強の合間を縫っているから最高でも1日1〜2時間位
するとこなたの1日のプレイ時間は6〜8時間位・・・

『ただけやってるの?』と言いたい位・・・

すると・・・

「ふぐあー・・・」

こなたは大きなあくびをする。

「もしかして徹夜?」

あつ、そうか・・・寝てる時間を・・・いや、勉強時間を削ってや
っているのか・・・

そういえば中学時代も授業中寝てたわね・・・

「うん」

「だったら少し寝てれば?こなたがいないんじゃあ誕生会出来ない
し・・・」

「んじやお言葉に甘えて少し寝てるね」

そう言つてベットにダイブする。

「本気なの?」

客人がいるのになるなんて・・・がっかりよ・・・

「たく・・・しょうがないわね・・・つて」

ベットに目を向けるとこなたはすでに寝ていた。

「本当に寝ちゃったの?」

「クー・・・」

「速すぎでしょ?」

ベットに座る。

「いつもはオタクで小悪魔けど、寝顔は可愛いわね・・・」

どうしてかなたさんの娘なのにこんな風になったのだろうか?

やっぱそれはお父さんの影響かな?

つん

「う・・・」

こなたの頬をつつく

「中には誰もいませんよ」

「どんな寝言よ？」

うふっ・・・

「寝顔は可愛いのに・・・」

赤ちゃんが寝てるように可愛い・・・

「意外とまつげ長いんだね・・・」

手入れをしていないのね・・・

「あ・・・なんかいいにおい・・・」

髪からシャンプーのにおいがしている。

ちゃんと髪は手入れしているんだ・・・

「ちよつとイタズラしちゃうかな？」

いつも自分だけ大変な思いしているし・・・

「あまゝい・・・」

髪を手に置く。

ゴトッ

ハッ

後ろを振り向くとみやなが立っていた。

足元にはジュースの入ったペットボトルが転がっていた。

ズリッ・・・

みやなは後退りする。

「あ、いや・・・これは・・・」

「ぐぐぐぐ、ぐぐくつりー!!」

ダダダダダ

みやなは慌てて下に降りて行った。

「ど、どうしよう・・・」
おろおろしていると・・・

ゴクッゴクッ

振り向くとこなたがジュースを飲んでいた。

「プハー」

「ど、どこから起きていたの？」

「ん？『寝顔だけなら』ってあたりから・・・」

「みどりんったらだいたんだよね？ナニされるかドキドキしちゃったよ」

ワナワナと怒りがこみ上げて来る。

「いいにおい・・・」

ガン！

「イタズラしちゃおかな？」

ゴン！

「あまゝい・・・」

こなたはニヤツと笑っていた。

「う・・・うう」

私は涙を流して、手を拳にして。

「こなたあゝ・・・」

「うごお！？」

白緑からは怒りのオーラが出ている。

こなたは動くに動けない。

「いい加減にしなさい！！」

ゴン、バキ、バキヤ

「うぎやあゝ！」

こなたに鉄拳を与えた。

その頃・・・

【キツチン】

「み、みどりがあんな事を・・・」

みやなは顔を真っ赤にして料理をしていた・・・

第11話 蒼髪色の誕生会 前編（後書き）

さうて次回の『みどすた』は？

作「あれ？」

誰もいない・・・

作「まあ『前編』て書いてあるから分かりますよね・・・」

作「次回『蒼髪色の誕生会 後編』」

お楽しみに

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2907f/>

らき すた もう1人の中心人物

2010年10月10日13時26分発行